# TNFD 提言に沿った情報開示

伊藤ハム米久ホールディングス株式会社

# 1. 伊藤八ム米久グループの自然に対する考え方

当社グループは、地球環境の保全が全世界共通の最重要課題であると認識し、事業活動を通じて環境に配慮し、持続可能な社会を実現するために積極的に取り組むことを環境理念として掲げています。

当社グループは、食肉・食肉加工事業を展開しており、さまざまな自然の恵みによって事業活動が成り立っています。地球温暖化や生物多様性の喪失に伴い、自然環境の劣化が進行すれば、原材料の調達や生産・物流体制など当社の事業継続に直接的な影響を及ぼしうると認識しています。

自然資本との関わりが深い事業を展開する当社グループにとって、生物多様性に関するリスクと機会を把握し、負の影響の回避・軽減に取り組むことは、当社の持続可能性を高める上でも有用であると考え、自然関連財務情報開示タスクフォース (TNFD) の提言に則った分析を開始しました。

当社グループは TNFD の理念に賛同し、ステークホルダーに対して透明性の高い情報開示を行ってまいります。

## 2. ガバナンス

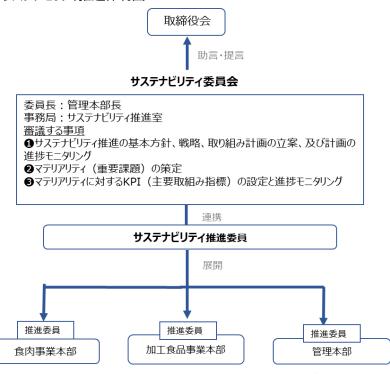
## サステナビリティ推進体制

当社は、グループ全体でサステナビリティの取り組みを推進するため、取締役会の諮問機関として、「サステナビリティ委員会」を設置しています。本委員会では、環境に関する方針・戦略の策定、取り組み指標の設定や進捗のモニタリング等について、審議を行っています。その後、取締役会にて審議、または報告がされています。

当社のサステナビリティ委員会は、取締役常務執行役員管理本部長が委員長を務め、各事業部門の責任者及び社外有 識者が委員として参加しており、社外の知見も得られる体制を整えています。

また、各事業部門、及びコーポレートの各部署にサステナビリティ推進委員を任命し、サステナビリティの取り組みを各事業部門・部署に周知し会社全体でサステナビリティへの取り組みを加速させる体制としています。

#### <サステナビリティ推進体制図>



## 3. 戦略

## 自然課題を分析するための評価手順

事業に関わる自然環境のリスクや機会を把握するために、TNFD が提唱する「LEAP アプローチ」に沿って評価を行いました。

#### <LEAP アプローチに沿った検討プロセス>

Scoping (対象評価範囲の選定)	当社バリューチェーン上の事業と自然のかかわりを把握し、評価対象範囲を設定。				
<u>Evaluate</u> (依存・影響の診断)					
<u>Locate</u> (自然との接点の発見)	当社の操業拠点、調達地域における自然との接点を評価。				
<u>Assess</u> (リスクと機会の評価)	当社にとって重要な自然関連のリスク・機会を特定。特定したリスク・機会を評価。				
<u>Prepare</u> (対応策の検討)	今までの評価結果を踏まえた対応策の検討。				

## Scoping(対象事業範囲の選定)

TNFD 分析を実施するにあたり、まず当社のバリューチェーンを整理しました。当社のバリューチェーン全体の自然への「依存」と「影響」の度合いを把握するため、ENCORE※という分析ツールを用いて評価・マッピングを行いました。

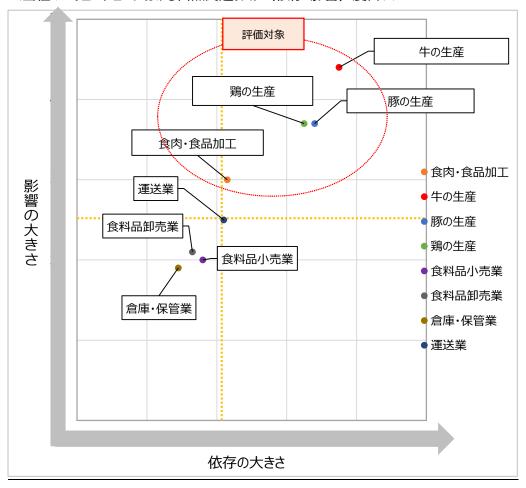
その結果、「原料の生産(牛・豚・鶏の飼育)」は、当社グループのバリューチェーンの中でも、依存と影響が大きいことが分かりました。このため、分析の対象事業は、自然との関わりが深い「原料の生産(牛・豚・鶏の飼育)」に加え、当社の主力事業である「食肉の加工処理」および「食品の製造・加工」としました。特に牛の生産は、他の家畜に比べて自然環境への依存や影響が大きかったことから、外部からの調達も調査対象としました。

※Global Canopy、UNEP FI、UNEP-WCMC によって開発された企業の自然への影響や依存度の大きさを把握するためのツール。

### <当社のバリューチェーンの整理>



<当社のバリューチェーンおける自然関連リスク(依存・影響)度合い>



### Evaluate(依存・影響の診断)

## ✓自然資本への依存と影響に関する事業別評価

当社のバリューチェーンにおける自然への依存と影響について、各事業活動別に ENCORE も参照し、より詳細な評価を 行いました。

その結果、一般的に「家畜の生産」は自然への依存・影響が大きく、その中でも「牛の生産」は依存・影響が特に大きいことが分かりました。特に飼育時の資源(飼料)利用や土壌・水への依存度は高く、自然環境が劣化した場合、大きな影響を受ける可能性があることが分かりました。また飼育時の土地利用、排せつ物汚染、GHG 排出への影響度が高く、自然環境への負荷を認識しました。

「食肉・食品加工(製造)」では、工場稼働で水を大量に使用することから、水資源への依存・影響が大きいことが分かりました。

## <ENCORE 重要度評価(ヒートマップ)>

ENCORE の分析結果に基づき、当社の事業活動における依存と影響を下記にまとめました。

		依存							影響																	
	供約	サー	ビス								也利用	資源利用	気候変動		汚	染		攪	乱							
事業	飼料などのバイオマス資源	遺伝物質	水資源	グローバルな気候調整	降水パターンの調整	ローカルな気候調整	大気浄化	土壌の質の調整	土壌と堆積物の維持	固形廃棄物の分解	水質の浄化	水流の維持	洪水の緩和	暴風の緩和	病害虫などの制御	陸域	淡水域	水資源	GHG排出	大気汚染	有害物質	栄養塩	固形廃棄物	侵略的外来生物	攪乱	
食肉・食品加工																										
牛の生産																										
豚の生産																										
鶏の生産																										
食料品小売業																										
食料品卸売業																										
倉庫・保管業																										Very High
運送業																										■ : High ■ : Medium

く当社のバリューチェーンの依存・影響の分析結果>※重要度の高い項目のみ掲載

事業 活動	家畜の生産	食肉·食品加工	運送	販売
依存	・飼料の供給 ・飼育・飼料生産での水利用(供給・浄化) ・飼育や飼料生産に適した土壌・気候の維持 ・自然災害への抑制機能	・操業に伴う水利用(供給・浄化)		
影響	・飼育に伴う土地利用 ・土壌・水・大気への汚染 ・飼育に伴うGHG排出 ・排せつ物等の汚染物質 の発生	・排水による汚染物 質の発生		

### Locate(自然との接点の発見)

### ✓評価対象の所在地における自然との接点の分析

次に当社の直接操業拠点(家畜の生産農場、食肉・食品加工工場)及び国内外の牛肉の主要な外部調達先を評価対象とし、TNFDが示す5つの指標(下記表参照)を用いて自然との接点の分析を行いました。牛の生産では、森林破壊のリスクが国際的に指摘されているため、各地域の森林損失の状況についても調査を行いました。 農場など場所が特定できない場合は、国の州など地域ごとに設定を行い、評価を実施しました。

## <TNFDが示す5つの評価項目に沿った指標>

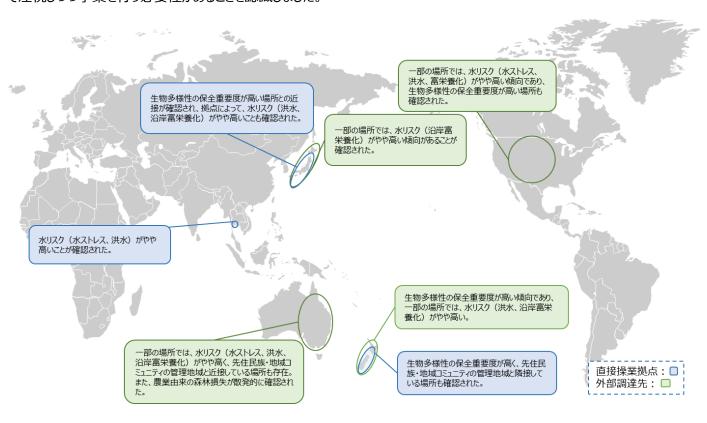
評価項目	指標	ツール
生物多様性の保全重要度	<ul><li>保護地域</li><li>Key Biodiversity Areas (生物多様性保全が重要な地域)</li><li>STARt (絶滅危惧種の脅威軽減スコア)</li></ul>	• IBAT
生態系の完全性が高い地域	Biodiversity Intactness Index (生物多様性完全度指数) ※生態系の構成・構造・機能の程度を測る。完全性が高い地域では生態系サービス提供の観点から潜在的な機会が高い	Resource Watch
生態系の完全性が急速に低下している地域	• Pressure on Biodiversity ※生態系の完全性が低下している地域では潜在的なリスクが大きい	WWF Biodiversity Risk Filter
水リスクが高い地域 →利用可能な水の質・量の劣化がある地域	<ul><li>ベースライン水ストレス</li><li>洪水リスク (河川・沿岸)</li><li>海洋富栄養化リスク</li></ul>	Aqueduct
先住民族と地域社会やステークホルダーにとっ て重要な生態系サービスを提供する地域	<ul> <li>先住民族・地域コミュニティ(IPLCs: Indigenous Peoples and Local Communities)の管理地</li> </ul>	Land Mark

#### <牛の生産のみ 追加評価項目>

森林破壊のリスク	・ 森林損失の状況	Global Forest Watch

## ✓評価対象の所在地における自然との接点の分析

調査を行った結果、各地域で注意が必要な項目は異なるため、各地域の自然の特徴を理解し、潜在するリスクについて注視しつつ事業を行う必要性があることを認識しました。



## Assess (リスクと機会の評価) 及び Prepare (対応策の検討)

Evaluate および Locate のプロセスを通じて得られた評価に基づき、当社にとって重要な自然関連のリスクと機会を特定・評価しました。

今までの評価結果と外部レポートを参照しながら、当社に関連する自然関連のリスクおよび機会を特定しました。次に、 当社事業における発生可能性と財務的影響の大きさ、影響が顕在化する時間軸を考慮のうえ、各リスク・機会の重要 度を評価しました。その後、社内の関係部門と特定されたリスク・機会に対する対応策について協議を行いました。

引き続き外部環境や世界の自然災害の状況などを注視しつつ、今後も継続的に社内外関係者と自然関連の評価を実施し、具体的な施策への検討を行っていきます。

### <牛の生産のリスク・機会>

リスク・機会 の種類	要因	事業へのインパクト	財務影響	リスク・機会への対応策		
	森林破壊の 発生	森林破壊に関与する牛肉調達による ブランドイメージ毀損や森林破壊規制 に対応するための対応コスト	売上の減少、直 接費の増加	・サプライヤーとの取引開始時やサプライヤー調査アンケート等にて森林破壊に関する状況をヒアリング		
移行リスク	汚染に関す る規制	生産による土壌汚染や水質汚染を低 減するための設備投資	資本支出の増加	・機能性の高い浄化設備の導入		
1911177		GHG 排出削減のための設備や技術への投資の増加	資本支出の増加	・GHG 排出量削減(再エネ化、省エネ化、燃料転換)への取り組み強化 ・家畜由来の GHG 排出量削減に向けた研究		
	保護地域の 拡大	保護地域拡大に伴う生産地移転や 調達先の変更	調達コストの増加	・調達先を分散		
	水不足	畜牛の生産性の低下	生産、調達コストの増加	・水の使用量削減、再生水の利用など取水効率向 上への取り組み促進		
物理的リスク	気温上昇等 の気象変化	品種や飼料の変更や調達先の変更	生産、調達コストの増加	・環境の変化に応じた持続可能な調達体制の構築		
	異常気象の 激甚化	災害による畜牛や飼料生産への被害	生産、調達コストの増加	* 深境の友   いこ心のごうがら   形は   のほ   体制の   情来		
機会	飼料変更	飼料変更による GHG 排出削減や生 産性の向上	売上の増加	・家畜由来の GHG 排出量削減に向けた研究		
<b>1成</b> 云	環境負荷の 低減	環境負荷が低い畜牛の生産によるブ ランドイメージの向上やニーズ増加	売上の増加	・排泄物のたい肥化 ・家畜由来の GHG 排出量削減に向けた研究		

# <食肉・食品加工のリスク・機会>

リスク・機会 の種類	要因	事業へのインパクト	財務影響	リスク・機会への対応策
	環境規制	環境規制強化による設備投資	資本支出の増 加	・GHG 排出量削減(再エネ化、省エネ化、燃料 転換)への取り組み強化 ・家畜排せつ物のリサイクル
移行リスク	水質汚染規 制	水質汚染規制強化による設備投 資	資本支出の増 加	・機能性の高い浄化設備の導入
	プラスチック 規制	代替素材の利用によるコスト増加	直接費の増加	・バイオマスプラスチックの活用、プラスチック使用量 削減
	廃棄物の削 減	食品廃棄物等の削減のための対応コスト増加	資本支出の増 加	・廃棄物排出量削減への取り組み促進 ・家畜排せつ物のリサイクル
	水不足	取水減少に伴う生産量の減少	直接費の増加、 売上の減少	・水使用量削減への取り組み促進
物理的リスク	気温上昇等 の気象変化	製造環境の調整に伴う対応コスト の増加	直接費の増加	・環境の変化に応じた持続可能な生産体制の構築
	異常気象の 激甚化	災害による工場の被災	直接費の増加	・BCP(事業継続計画)の整備、高度化
	エシカル消 費への需要 シフト	持続可能なたんぱく質生産による 売上の増加	売上の増加	・植物性たんぱく質による売り上げの増加
	商品開発	代替肉の研究開発による新たな売 上機会の獲得	売上の増加	・培養肉の開発
機会	環境負荷の 低減	取排水量削減や GHG 排出削減 等による環境負荷の低減によるブラ ンドイメージ向上やニーズ増加	売上の増加	・GHG 排出量削減(再エネ化、省エネ化、燃料 転換)への取り組み強化 ・家畜排せつ物のリサイクル・食品廃棄物リサイクル
	廃棄物のア ップサイクル	家畜由来の廃棄物(血液、心膜 など)のアップサイクルによる収入源 の多様化	売上の増加	・副産物の有効利用

## 4. リスクと影響の管理

当社グループでは、リスク管理基本規程に基づき、当社グループの経営目標や事業活動に関わるリスクを特定・評価・分析し、社会からの長期的信頼・信用を継続的に確保するためのリスク管理体制を整備・運用しています。

具体的には、業績、株価、財務状況等に影響を及ぼす可能性のある経営上のリスクを、発生可能性と影響度を勘案のうえ、取締役会にて分析・最終評価し、年に1回全社的なリスクマップの見直しを実施しています。

こうして特定したリスクに対して適切に対応し、設定した課題に対する各種施策を着実に実行できるような体制としています。

## 5. 指標と目標

当社グループでは環境保全に関わる目標を定め、達成に向けて取り組みを推進しています。

取り組み項目	指標	目標
気候変動への対応	温室効果ガス排出量(CO2 換算)	2030 年度 2016 年度(375 千 t)比半減、 2050 年ネットゼロ
	用水使用量(原単位)	2024 年度を基準年とし、2030 年度までに 3%削減
	廃棄物排出量(原単位)	2024 年度を基準年とし、2030 年度までに 3%削減
資源循環	動物の糞のリサイクル率	100%を維持

# 6. 具体的な取り組み

## <取り組み例①> プラスチック使用量削減

当社グループは、商品包材を環境配慮型の形態へ変更を行い、プラスチック使用量の削減に取り組んでいます。「The GRAND アルトバイエルン®」は 2022 年に巾着形態の商品包材を環境配慮型に変更したことでプラスチック使用量を 30%削減しました。この取り組みは、包材サイズやトレイの縮小だけでなく、包装資材の薄膜化やバイオマスプラスチック などの環境配慮型素材の活用など、さまざまな方法を通じて実施しています。これにより、プラスチックによる海洋汚染の低減にも貢献しています。

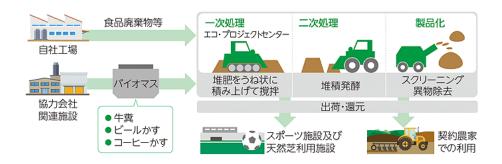
いずれの商品も、内容量はそのままに、品質を維持しながらプラスチック使用量の削減を実現しています。



### <取り組み例②>食品廃棄物のリサイクル

当社グループの食品廃棄物リサイクル活動のひとつに、米久エコ・プロジェクトセンター(静岡県富士宮市)による取り組みがあります。同センターでは自社工場や協力会社から排出される食品廃棄物をリサイクルし、良質な肥料(コンポストパワー/Compost Power)を年間約 500t 生産しています。

つくられた肥料は契約農家での利用など、さまざまな用途に使用され、環境負荷低減に貢献しています。







米久エコ・プロジェクトセンターと堆肥拡販作業の様子

#### <取り組み例③>鶏糞の100%再利用(ボイラーの導入/堆肥化)

生産農場である米久おいしい鶏(鳥取・静岡)の鶏舎から収集した鶏糞はすべて 100%リサイクルしています。鶏糞を燃料として活用できるボイラーを導入し、得られた熱を鶏舎の床暖房に利用することで、鶏が快適に育つ環境づくりに貢献しています。また、工場で使用する温水にも再利用しており、資源の有効活用を図っています。さらに、鶏糞は堆肥化にも活用しており、環境負荷の低減に努めています。



鶏糞を収集している様子

### <取り組み例④>副産物の有効利用

サンキョーミートでは、2027年度より畜肉エキスの製造・販売事業を開始する予定です。

畜肉エキスは食肉を加工する際に発生する副産物である骨をさらに加工して得られるもので、ラーメンスープや加工食品などに使用されます。

サンキョーミートの自社工場から供給する鮮度の高い国産原料 (豚骨など) を活用し、原料調達から加工までを一貫して行うことで安全で良質な製品を安定的に供給します。

また、グループ内でエキス事業を内製化することで、バリューチェーン全体の価値を最大化するとともに、副産物の有効活用を 通じて「持続可能な畜産産業への貢献」にも寄与してまいります。



エキス製造工場外観

## <取り組み例⑤> ANZCO FOODS 生物多様性プロジェクトの実施

当社子会社の ANZCO FOODS が所在するニュージーランドでは、全在来植生のうち 24%が羊や牛の放牧地に存在しています。 ANZCO のファイブスタービーフ農場では地域と協力し、生物多様性プロジェクトを進めてきました。 現地で採取した種子から生態系に適合した植樹を行い、 これまでに植樹した総数は 10,000 本に達しました。 AZNCO FOODS では、今後 7 年間にわたり継続して、毎年 1,000 本の在来種を植樹することを約束しています。